

教育者宮澤賢治の研究（II）

——「法華經」信仰と教育——

森 下 恭 光

緒 言

大正十年十二月三日に始まり、大正十五年三月三十一日で終止した宮澤賢治の教師生活は、その在職年数が短かく終わっているのに比較すると、教え子達の受けた印象が刺激的、かつ、特異なものであったことは、前稿において指摘しておいた。

しかし、印象の刺激性や特異性の底に存在したはずのものが何であったかについては、『法華經』に触れ、そこから彼が培かっていた精神性のようなものであると想像されることを示唆するに止めておいた。

そこで、本稿では、彼の教師生活の根底をなしていたと考えられる『法華經』の教理とその熱烈な信仰者であった彼の精神生活との関係を探求する。そのことにより、彼の教育活動の特性がどこから来るものであるかという、その理由や根源もある程度は明らかにできるのではないかと考えている。理解し難い部分の多い人とされる宮澤賢治についての研究が、本稿において、目的の一部分でも達せられることを願うものである。

賢治が『法華經』⁽¹⁾に接し、その教理に感銘を受け、以後、死に至るまで、その理解と実践に精神と肉体のエネルギーを傾注することになった最初の時点は、大正三年から大正四年の間に求めることができる。その根拠としては、同時期に彼は進学、結婚、家業の継承問題で父と対立し煩悶の日々を送る間に、島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』⁽²⁾を読み、異常なまでの感動を受けたとされているからである。

『法華經』は、正確には、『妙法蓮華經』と呼称され、内容は、8巻28章より成り立っている。

各章のタイトルは次のとおりである。第一章、序品。第二章、方便品。第三章、譬喩品。第四章、信解品。第五章、藥草論品。第六章、授記品。第七章、化城喩品。第八章、五百弟子受記品。第九章、授学無学人記品。第十章、法師品。第十一章、見宝塔品。第十二章、提婆達多品。第十三章、勸持品。第十四章、安樂行品。第十五章、從地涌出品。第十六章、如来寿量品。第十七章、分別功德品。第十八章、隨喜功德品。第十九章、法師功德品。第二十章、常不輕菩薩品。第二十一章、如来神力品。第二十二章、嘱累品。第二十三章、藥王菩薩本事品。第二十四章、妙音菩薩品。第二十五章、觀世音菩薩普門品。第二十六章、陀羅尼品。第二十七章、妙莊嚴王本事品。第二十八章、普賢菩薩勸發品。

賢治が異常な感動を以って読んだとされる島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』は、『妙法蓮華經』を大衆向けに邦語訳したものであり、その性質上、学問的著述であるとはいえないものである。しかし、編者の島地大等⁽³⁾は、天台学の第一人者であり、『天台教学史』、『真

宗大綱』、『真宗聖典』等の著書もある仏教学者である。そのことを考量するならば、大衆向けの出版物であるとはいっても『妙法蓮華経』に初めて接する時期での書物としては、適当なものであったといえよう。

とも角、賢治は、人生煩悶の最中に『妙法蓮華経』に触れ、そこに展開される教理の精神世界へ急傾斜して行く。

生来、繊細で、多感な賢治は、自省癖も強く、そのことは、一度、宗教にその方向を向けると、熱烈な信者になって行く可能性を秘めていたといえる。

但し、その宗教が仏教であり、中でも『妙法蓮華経』であったことが、いわば偶然の結果であるとしても、それによって彼のその後の人生が急転回することになったことを知るならば、宗教の信仰が人生において占める位置や、意味の重さを痛感させられる。

ところで、彼の父親は、浄土真宗の篤信家で、その子賢治も幼少の時より、同宗に親しんで来たのである。その彼が、宗旨の異なる法華宗に急接近することになるのであるから、その背景に何らかの理由があったと考えるのが自然であり、妥当でもあろう。

背景になる何らかの理由として考えられるものの一つに、父子の対立があった。それは、学業に強い興味を抱き進学を切望する賢治に、進学より家業の継承を願う家父長としての父親がとった強圧的態度や、肥厚性鼻炎手術等のため入院中に抱いた看護婦への愛情⁽⁴⁾から彼女との結婚の許しを求めたところ、父親がそれを拒否するという出来事にその端緒を見出すことができるように思われる。

進学の方は、一年後に、希望どおりの盛岡高等農林学校に入学したので解決したが、恋愛体験の方は、父親の承認を得られず、不調に終わっている。

その他の、父子対立に連なる理由として考えられるのは、信仰姿勢の違いである。

賢治の父親が信仰する浄土真宗は、親鸞⁽⁵⁾を宗祖とし、阿弥陀如来を専ら拝し、自力による極楽往生を断念し、阿弥陀如来による極楽往生を願う故に他力宗と呼称される。

法然⁽⁶⁾を宗祖とする浄土宗にしても、親鸞を宗祖とする浄土真宗にしても、自力による極楽往生を断念するところに信仰の出発点を求めている。

釈尊⁽⁷⁾と略称されるゴータマ・シッダルタ⁽⁸⁾による仏教は、仏（覚者）になることを究極の目標とするが、それは、すべての人間にとって可能であるわけではない。人間が人間であることの究極的認識に到達することが覚ることであるとするならば、一種の哲学的思惟の作業ともいえるその作業は、ごく限られた者にしか許されない極めて困難な作業であるともいえるであろう。

もし、そうであるとするならば、仏教は限られた者にしか思恵のない宗教であることになる。そこで、その思恵の範囲を極限にまで拡大しようとする宗派が仏教の中に発生し、それらは大乘仏教と呼称されるようになる。

浄土真宗は、大乘仏教⁽⁹⁾の系統に属し、それは自力によって、仏（覚者）⁽¹⁰⁾に到達するのを断念した者達の宗派であるため、「一切衆生済度」⁽¹¹⁾を誓願されているとされる阿弥陀如来を信仰するのである。

しかも、信仰をあらわす行為は、「南無阿弥陀仏」と唱えることに尽きる。阿弥陀如来による救済を求めて、専ら「南無阿弥陀仏」を唱える信仰形式は、確かに実行しやすいものであり、「易行道」⁽¹²⁾と呼称される理由もそこに存在するのである。

幼少の時より、浄土真宗信者のとる信仰生活を自覚もないままに、いわば周囲の者のするように真似る形で送って来た賢治にとって、自我の確立期にあたる青年期に偶然接する

ことになった『妙法蓮華經』は、どのように印象されたのであろうか。

また、親も自分自身も信仰して来た阿弥陀如来の「一切衆生済度」の誓願は、青年期に達した賢治にとってどのような意味を持つことになったのであろうか。

前にも述べたように、賢治の自省癖ともいべき性向は、生来のものであり、そのような性向は、宗教あるいは宗教的なものへの傾斜を起こさせやすかったと考えられる。

ここに言う、宗教あるいは宗教的なものへの傾斜とは、人間や自然を超える存在、つまり超越的・絶対的存在への傾斜を意味する。

人間や自然を超越する存在は、人間や自然を超える次元で存在し、しかも、それらを支配するものであるから、理解をも超える存在でもある。そのような、理解をも超える存在へ傾斜する性向は、畏怖すべきもの、崇拝すべきものとしての超越的存在、絶対的存在を求め、憧憬する心を発生させる。賢治は、幼少の時より自然物(動物、植物、鉱物)に強い興味を示した⁽¹³⁾が、そのことも、結局は、この超越的存在、絶対的存在へ向けられる探求心、憧憬の念の初期的表われであったと考えられる。

そういう意味において、彼は天性の宗教者であったといえる。

ところで、超越的存在や絶対的存在を意識するようになると、人は、必然的に自己の卑小性、卑俗性に直面することになる。

賢治のばあい、少年期から青年期にかけて、とくに、この自己の卑小性、卑俗性に直面することが多くなる。動物、植物といった生物、鉱物という無生物、それらの彼が親しんで来た物に比較すると、ヒトという名の生物的存在であり、人間という社会的存在である自分は、余りにも卑小であり、卑俗であると認識されたのである。

その上に、彼には、自己の境遇に対する切実な反省があった。それは、宮澤家の家業に関するものであった。彼の生家である宮澤家は、質店を営んでいた。質業は、金融業の一種として、社会的にその存在意義を認知されている職業であるにもかかわらず、彼にとっては、この家業が倫理的に大きな負荷になっていた。

金融業であれば、金融によって利益を得ることを目的とするわけで、当然の成行として利益追求のため、諸手段を用いることを要求される。ところが、賢治にとっては、利益追求のために用いられる諸手段が倫理に反するものと思われ、そのような手段を用いる家業を忌避するような行動をとることになる。

それは感傷的行動であり、青少年期に見られる倫理的潔癖感の一種であったとも考えられるが、しかし、通常のばあいと異なり、彼においては、その行動は一過性のもので終わらなかった。

貧者、もしくは経済的不調状況にある者に金融する行為による利益の追求は、商業としては是認されることであっても、彼の倫理感からすると認識され難く、この思いは終生変わらず持続されることになるのである。

しかし、家業であれば、それによって賢治の生活も支えられているわけであるから、家業を否定することは、同時に自己の生活基盤を否定することでもあった。聡明な賢治がこの矛盾に気付かぬはずはなく、そのことに思いを致す度に、彼は苦悩しなければならなかったのである。

一方、賢治の父親は、浄土真宗の篤信家⁽¹⁴⁾であり、家父長として一家の生活を支えるべき責任者でもあったから、家業である質業に対して、賢治のような疑念や忌避感など抱くはずもなかった。

息子がそのことによって苦悩しているにもかかわらず、その父親はそれを理解しないのみならず、対外的には、熱心な浄土教信者として行動し、その事により社会的信頼も得ているという現実を見るにつけ、息子賢治の父親に対する反発は強まる一方であった。それは又、父親の信仰する浄土真宗から離反する行為をとらせる展開にもつながることになる。

このような背景があって、彼は、浄土真宗から次第に離れて行く。しかし、大正四年八月に、『漢和対照妙法蓮華經』の編者である島地大等の歎異鈔法話を一週間聴講しているところから推察すると、彼の浄土真宗信仰は、突然に終息したわけではなかった。

『歎異鈔』⁽¹⁵⁾は、親鸞の言行録を中心内容とし、信者達の尊重する著作物であるから、その講和を聴くということは、当然、浄土真宗の根本思想に触れる話を聴くことになるからである。

さらに、大正五年四月に、島地大等に面会を求めている事実から、『妙法蓮華經』への傾斜は、島地大等を通して深まって行ったという経過が確認されるものの、六月には報恩寺の尾崎文英について参禅⁽¹⁶⁾し、同じ頃、盛岡教会でタピング牧師の聖書講義を聴講している⁽¹⁷⁾ことを知るならば、この時期、彼の信仰生活は『妙法蓮華經』のみに集約されていたと考えるのは妥当でないことも確かであろう。

つまり、彼の信仰生活は、この時期、かなりの振幅を見せているということである。

二

前述の事情から、多少の経緯はあるものの、賢治の『妙法蓮華經』信仰は確実に深まっていく。

ところで、大正三年に、偶然読んだ島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』が彼に衝撃的感動を与えたことは前述のとおりであるが、本文612頁の本書は、如何なる理由で青年賢治に感動を与えたのであろうか。

『妙法蓮華經』そのものは前にも記したように、8巻28章より成っているが、全体的に見て、とくに、中心的主題を取り扱っている章ということになると限られて来る。

全巻の中心的主題は、第一巻第二章「方便品」⁽¹⁸⁾（前半の中心をなす章であるとされている）、第六巻第十六章「如来寿量品」⁽¹⁹⁾（『妙法蓮華經』の核心的内容をなす章であるとされている）で説かれている。それを考えると、後に記すように、賢治が最も感動を受けたとされるのが、第六巻第十六章「如来寿量品」であるのは、それが『妙法蓮華經』の核心部分であるが故に、まことに意味深いことであるといわねばならない。

次に「如来寿量品」の要点を島地大等編『漢和対照妙法蓮華經』によって示すと次のようになる。

「知恵聡達にして、明らかに方薬に練し、善く衆病を治す」⁽²⁰⁾名医がいた。彼には多くの子どもがおり、彼の旅行中に毒薬を飲む。

中毒症状を起こした子ども達は苦悶し、大地にのたうち回る。折よく名医である父親が旅行から帰って来たのを見て、子ども達は、事故の報告を次のようにする。「我等愚癡にして、誤りて毒薬を服せり」⁽²¹⁾と。そして、「願わくば救療せられて、更に寿命を賜え」⁽²²⁾と頼む。そこで父親は、薬を調合して子ども達にそれを服用するようすすめる。

子ども達の中で、「心を失わざる者は」⁽²³⁾父親の調合した薬が、色も香りもともに良いのを知り、すぐに飲み、その結果、症状は間もなく治まり、治癒する。

ところが、父親の帰りを喜び迎えながらも、中毒症状の重い「心を失える」^{こころをうしな}」⁽²⁴⁾子どもは、折角の良薬を服用しようとしな。薬を飲まない限り病気は治癒しないわけであるから、薬を飲む気を起こさせるにはどうすればよいのかを父親は思案する。

思案の結果、父親は、一つの策を用いる。彼は、子ども達を前にして告げる。「汝等^{なんだちまさ}当に知るべし。我今衰老して、死の時^し已に至りぬ。是の好き良薬を、今留めて此に在く。汝取りて服すべし。差えじと憂うこと勿れ」。⁽²⁵⁾

このような言葉を残して父親は旅に出てしまう。その後、彼は旅先から使を出して、子ども達に父親の死を伝える報告をさせる。

この報せを受けた子ども達は、「心大いに憂悩して是の念を作さく、若し父在しなば、我等^{われら}を慈愍^{じみん}して、能く救護せられまし」。⁽²⁶⁾と嘆き悲しむ。

旅に出たまま遂に帰らぬ人となった父親のことを思うにつけ、今さらながら父親の存在の大きさを知らされるばかりであった。そうする間に、父親が家を離れる時、「私が調合したよく効く薬を遺しておくから必要と思った時に服用せよ」と言い遺した言葉を想い出し、これを服用する。

すると、「毒の病皆愈ゆ」⁽²⁷⁾ということになり、長らく苦しんだ病気から全快する。

旅先でわが子がすべて自分の調合した薬によって病の癒えたことを知らされた父親は、旅から帰り、全快した子ども達に面会して、殊の外喜ぶ。

以上が「医子の喩」と呼称される釈尊によって説かれた譬話の骨子である。

譬話であるから、話そのものの意味よりも、その背後に暗示されているものを読みとらなければならない。

それでは、「医子の喩」の背後に暗示されているものとは何か。推察するならば、少なくとも次のような教説を読みとることができるであろう。

まず、すべての病気を治療し、患者を全快させることができるという名医は釈尊であろう。また、毒薬を飲み、中毒する子ども達は、いうまでもなく衆生、とりわけ煩惱に苦しむわれわれ人間を指すであろう。そして、良薬は、それを飲めば病気が癒えるのであることを考えるならば、釈尊による教説、すなわち、仏法を意味するものであるに違いない。

この三要素によって、更に次のようなことを暗示するものと解釈される。

煩惱という毒薬を飲み苦しむ人間の中で、名医（釈尊）の調合した薬（釈尊の説く教え）を素直に飲む者（煩惱とか罪を自覚して、素直に釈尊の教えを信仰する者）は、そのことによって病気が癒える（煩惱や罪から解放され済まれる）。それに対して、名医（釈尊）が調合した薬（釈尊の教え）を飲まない者（自己の煩惱や罪を自覚せず、素直に釈尊の教えに帰依しない者）は、病気から回復しない（煩惱や罪から解放されず、済まれることもない）。

次に、名医である父親が、薬を飲もうとしない子どもに対して、無理に飲ませることをせず、子ども達を家に残して旅に出る。その際、「私が死んでこの世に居なくなっても、ここに薬を遺して置くから、飲みたいと思った時に飲め」と言い遺したということは、如何なる意味を持つか。さらに、生きていながら、他人を介して、既に親は死んだと子ども達に伝えさせるという筋立は何を意味するのであろうか。

その解釈は、次のようになされ得るであろう。すなわち、名医である父親が、折角、調合した薬を飲まない子どもに強いて薬を飲ませようとしなかったのは、薬を飲む（釈尊の教えに帰依する）という行為は、あくまでも自発的なものでなければ効き目がない。した

がって、「飲みたいと思った時に飲め」（釈尊の教えに納得した時に初めて帰依することになるのだ）。しかし、何もしないで待つことは、薬を飲めば治癒するものを、いつまでも治癒しないままに放置することにもなりかねない。そこで、薬を飲む気を起こさせる契機として、父親が死んだという知らせを子ども達に伝えさせるという策略を用いるということであろう。

ところで、「医子の喩」の教説に出て来る釈尊は、歴史上に実在した釈尊自身であると解釈するだけでは、暗示されていることを十分に理解することにはならないように思われる。

それはどの部分においてそうであるかというならば、父親が良薬を飲まぬ子ども達を残して家を去る時に、「我今衰老して、死の時已に至りぬ。是の好き良薬を、今留めて此に在く。汝取りて服すべし。差えじと憂うること勿れ」と言い遺す場面がそれとして指摘されよう。

つまり、子ども達の目前に居て、言葉を発している父親（釈尊）と、旅に出た後、他者を介してその死が伝えられた父親（釈尊）は、子ども達にとっては同じ父親であっても、その性質には相異があることが諒解されるのである。

子ども達の前に居る父親は、現実存在する父親であり、その死を伝えられる父親は観念としての父親である。現実の父親と観念としての父親の二種類がそこに示されていると考えられる。

現実の父親には生命があり、生命がある限り、いずれ死を迎えなければならない。その意味において、父親に譬えられる歴史上の釈尊には死があった。

一方、観念の父親には生命はないので、死はない。同じ意味において、観念の釈尊に生命はないので、死もない。

大乘仏教では、歴史上の釈尊を「事（事実）の釈尊」⁽²⁸⁾と呼称し、その釈尊が覚った仏法を「理（真理）の釈尊」⁽²⁹⁾と呼称する。

このことを知るならば、「医子の喩」に語られる二種類の父親は、巧みに仏法を大衆（人間）に覚らせるための方便として作られた設定であることが諒解されるのである。

三

大正三年の後半期は、賢治が進学、恋愛、家業の継承という、いずれも彼にとっては切実な人生上の課題に直面している時期であり、そういう時期に偶然読み、その教説に触れ、激しく感動したのが島地大等編『漢和对照妙法蓮華經』であったことは先に記したとおりである。しかも、第六卷第十六章「如来寿量品」こそは、彼が最も感動した部分であるので、その内容を紹介し、中でも「医子の喩」と呼称される譬話がその中核をなすことから、その内容と、それによって暗示されていると推察される意味について見て来たわけである。

そこで以下において、この『妙法蓮華經』との出会いが、賢治のその後如何なる影響を及ぼすことになるのかを考察したい。

彼の『妙法蓮華經』への傾倒が形の上で顕著に表れているのは、保阪嘉内に宛て大正七年六月二十七日に出した次の書簡である。彼と保阪は、盛岡高等農林学校自啓寮で同室になった縁で親しくなり、大正六年七月に、小菅健吉・河本義行・保阪嘉内を中心メンバーとして謄写版刷り同人誌『アザリア』⁽³⁰⁾を創刊したことで最も信頼すべき友人と考えようになった。

「保阪さん。諸共に深正に至心に立ち上り、敬心を以て歡喜を以てかの赤い経巻を手にとり静にその方便品、寿量品を読み奉ろうではありませんか」⁽³¹⁾

親友に宛てた書簡であるため、端的に『妙法蓮華經』を指示して、それを読むことを薦めている。「かの赤い経巻」とあるのは、島地大等編の『漢和对照妙法蓮華經』の表紙が鮮やかな赤色を呈していたため、そのように表現したのであろう。

大正七年六月に賢治が書簡を送った時、保阪嘉内は、同年二月、『アザリア』に発表した「社会と自分」の内容がとがめられ退学処分を受けているので、既に盛岡高等農林学校の学生ではなくなっていた。しかも実母を喪うという苦境に立ち悩む親友であるからこそ、賢治は、自身が傾倒し、精神生活の方向を決定した本を推薦したものと思われる。

この年、賢治は、二月に得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を提出し、三月には、得業証書を取得している。引き続き、研究生として残り、九月まで関豊太郎教授指導の下に稗貫郡の土性調査に従事しているが、その間、六月末に肋膜炎により一カ月の静養をとっている。

保阪は、学校を退学処分により去っており、彼自身は、病身であったことを考えると、彼の書簡が切迫した調子を帯びていることの意味が諒解されるであろう。段階がさらに進んで『妙法蓮華經』への傾倒が、日蓮上人への信仰に進んでいることが確認されるのは、大正九年七月二十二日に保阪に宛てた書簡の次の文面である。

「今日私ハ改メテコノ願ヲ九誠心王大菩薩即チ世界唯一ノ大導師日蓮大上人ノ御前ニ捧ゲ奉リ新ニ大上人ノ御命ニ従ッテ起居シテ御違背申シ上ゲナイコトヲ祈リマス。」⁽³²⁾とあるのがそれである。

これがさらに発展したのが、同じく保阪嘉内に宛てて、同年十二月二日に書かれた次の書簡である。

「今度私は国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に在るのです。謹んで此事を御知らせ致し恭しくあなたの御帰正を祈り奉ります。」⁽³³⁾

ついに賢治は、個人的に『妙法蓮華經』に傾倒し、その関連で日蓮上人を尊崇する一信者に止まるのではなく、「国柱会」⁽³⁴⁾という宗教団体に入会し、組織の中で行動することまで決断するところまで来ている。

「国柱会」に入会後は、町内を歩き寒修行をするなど、外部に対しても明確に法華経信者であることが確認されるような行動をとっている。父親に対して改宗を迫るのもこの時期である。

大正十年一月二十三日、彼は、もはや郷里に留まっていられず、無断で上京する。国柱会本部を訪れた彼は、高知尾智耀⁽³⁵⁾に会う。

無断で上京したこともあり、生活費は自力によって獲得する必要があったので、本郷菊坂町75、稲垣方に間借をし、文信社で筆耕や校正に従事した。

賢治にとっては、この時期、法華経信仰は「国柱会」を抜きにしては考えられなかったもので、如何なる苦勞を伴うものであっても、それは耐えるべきものであった。

実際、この時期の賢治は、ひたすら法華経信者として生きることを考えていたので、苦勞も苦勞と感じていないようであった。

そのような賢治に対して、高知尾智耀は、日蓮主義信仰の在り方として、「ソロバンを取るものは、そのソロバンの上に、鋤鍬をとるものは、その鋤鍬の上に、ペンをとるものは、

そのペンのさきに、信仰の活きた働きが現われてゆかなければならぬ」⁽³⁶⁾と説き、詩歌文学を得意とするという賢治は、「詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようではならぬ」⁽³⁷⁾として、文学創作へ進むべきであることを示唆している。

賢治も後に、「高知尾師ノ獎メニヨリ法華文学ノ創作」⁽³⁸⁾への道を進むことになったと、そのことを認めている。文学創作に熱中しつつあったこの時期に、心配して上京した父政次郎を迎え、6日間、関西旅行を共にしている。四月のことである。

父親が帰って4カ月程が経過したところで、郷里より「トシビョウウキスグカエレ」⁽³⁹⁾の電報が届く。妹の病気の報に、固い決意で上京し、父親の説得にも応じなかった賢治は、即座に帰郷を決意し、大トランクー杯の原稿を携えて、病床にある妹トシの見舞いのため帰郷する。

以後、家業の古着、質商を手伝う一方で、すでに始めていた文学創作に熱中し、童話では、『どんぐりと山猫』⁽⁴⁰⁾、『注文の多い料理店』⁽⁴¹⁾、『狼森と策森、盗森』⁽⁴²⁾など、後に『注文の多い料理店』⁽⁴³⁾と題して一冊にまとめ出版されるものを創作している。また、詩では、『冬のスケッチ』⁽⁴⁴⁾などの創作を手がけている。

同年十二月になって、稗貫農学校の岩崎三男治教諭が兵役に服することになった欠員の補充として、賢治に教諭としての就任依頼がなされるという事態が発生する。

賢治にとって突然発生したこの就職問題は、当惑する事態であり、彼自身は、教職を自己の適職であるとは考えていなかったのも、当初はこれを辞退している。

周囲にも、彼が熱烈な法華経の信者であり、花巻の街中を題目を唱えつつうちわ太鼓を鳴らして歩くのを見て、教師としての不適格を主張する者があったとされている。⁽⁴⁵⁾

しかし、一方で、彼を強く支持する稗貫郡長の葛博、郡視学の羽田正らがおり、彼等の働きで、賢治は、結局大正十年十二月三日、稗貫郡立稗貫農学校教諭に就任することとなる。積極的意欲も持たないままに就いた教職であった。

さて、教師になった後の賢治の信仰生活はどのようなものであったか。

鎌田一相によれば、「賢治が熱心な法華経信者だということを知らなかったという生徒は多い。しかし、養蚕室や、舎監室で、朗々とお経を唱えているのは聞いていた。たいていの場合は『南無妙法蓮華経』だった。』⁽⁴⁶⁾」ということで、勤務先で熱烈な信者としての姿を見せることは意識的に抑制していたことを伺わせる。

法華経の熱烈な信者という側面を生徒達に見せないように、自己抑制していたとしても、彼の緊迫・高揚した精神は、自ら外見にも現われていたと思わせる指摘がある。

「先生は嘘やいつわりを極度に嫌われた」⁽⁴⁷⁾、「先生を訪問すること二十数回、その間一度も迷惑そうな顔をされたことはなかった」⁽⁴⁸⁾、「とにかく彼は、物質の世界、有限なものの世界から逃れようとした人でした。」⁽⁴⁹⁾、「彼は他人の喜びや悲しみを自分の喜びや悲しみと同じように感ずることの出来る人だった。相当自責の人で、自分で自分を痛めつけるようなことを始終やっている。」⁽⁵⁰⁾

これらの指摘に共通するものは、賢治の誠実で愛情豊かな人柄と、高い精神性、それはとくに自我の超克と他者への奉仕という形で表れていたことを伺わせるものである。

このような姿勢は、彼が教職在職中の全期間を通じて変わらないものであった。

前にも記したように、彼自身は、教職を自己の適職であると認識していたわけではないにもかかわらず、在職期間中の勤務態度は、勤勉を超え、献身的・奉仕的でさえあったことについては、多くの事例がそれを物語っている。

ところで、献身的・奉仕的でさえあった教師賢治の精神の根底をなしていたものは何であったか。

結論的にいうならば、それは、『妙法蓮華経』であり、中でも、第六卷第十六章の「如来寿量品」に展開されている教理であるといってよいであろう。

『妙法蓮華経』によって教示されている「人間はみな仏性を具えている」という原理を基本に据えながら、「如来寿量品」の教理を現実に生かして行くというのが農学校における賢治の教育にあたっての信念であったということである。

賢治は、まず自己の中にある仏性を開発することに努める。開発するということは、既にあるもの、与えられているものに気づき、それを生かすことである。そこで、賢治は自己の特性（仏性）を模索し開発しようとする。

そのことと生徒の教育は如何にかかわりを持つのかといえ、彼においては、生徒ひとりひとりにも、特性、すなわち仏性があるのだから、それを開発する介助者としてかかわることが教育するということであると考えられたはずである。このように考えることにより、彼の教育姿勢が見せた特質と卓越性の根源が理解されるのではないかと考える。

結語

宮澤賢治が農学校教師として、生徒の教育にあたった期間は、四年余りで短期間であったにもかかわらず、彼の教えを受けた生徒達の受けた印象が刺戟的で特異であったのは何故であるか。その根本にある理由を探究するのが本稿の目的であった。

考察の結果、それは「法華経」信仰とのかかわりを持ち、彼の教育活動の根底に、「法華経」に展開される人間観、とくに、「人間はすべて仏性を有する」とする人間観に根ざす教育観があったために、それによって行なわれる教育は、外見的に刺戟的であり、風変わりなものとして映るという結果をもたらしたのではないかと推測されるに至った。

自己の特性に敏感で、その実現に真摯であった彼は、他者としての生徒が個々に与えられている特性を実現することにも真摯であった。そして、その他者としての生徒の特性を自己の特性と同様に尊重する精神こそは、「法華経」信仰から来るものであったと思惟されるのである。

注

- (1) 「妙法蓮華経」の略称。原語では Saddharma-pundarika-sutra という。その原型は紀元後1世紀中頃から2世紀頃と考えられている。鳩摩羅什の漢訳本が流布している。
- (2) 島地大等が大正3年に著述。所謂赤本法華経の原本である。
- (3) 天台学の第一人者で『天台教学史』、『真宗大綱』、『真宗聖典』等の著者。
- (4) 少年期に彼が体験した女性への強い慕情とでもいうべきものであった。
- (5) 親鸞(1173～1262)は、鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖で、主著に『教行信証』がある。
- (6) 法然(1133～1212)は、浄土宗の開祖。主著に『選択本願念仏集』がある。
- (7) 釈迦牟尼世尊を略して釈尊としたもの。
- (8) ゴータマ・シッダルタ (Gotama Siddhattha, B.C.463頃～383頃)、釈迦とも呼び、仏教の開祖。
- (9) 小乗仏教に対するもので、他者の救済をも求める仏教。
- (10) 仏は覚者を意味し、声聞、縁覚、菩薩、仏の順序では究極の段階。

- (11) 阿弥陀如来が法蔵菩薩であった時の48誓願の第18誓願。
- (12) 難行道に対するもので、困難な修行を伴わない道の意。
- (13) 天沢退二郎によれば、小学校4年頃よりこの傾向が見られたという。(新潮日本文学アルバム、宮澤賢治、1984年、9ページ。)
- (14) 別冊国文学・NO.6 佐藤泰正編、宮澤賢治必携、56～57ページ参照。
- (15) 親鸞の死後30年の間に成立したと推定される。本文18章の前半は親鸞の語録で、後半の9章は唯円の意見が記されている。
- (16) 天沢退二郎、新潮日本文学のアルバム、宮澤賢治、1984年、23ページ。
- (17) 同前、23ページ。
- (18) 島地大等師虔修、漢和对照妙法蓮華経、昭和63年、ニチレン出版、39～81ページ。
- (19) 同前書、413～429ページ。
- (20) 同前書、420ページ。
- (21) 同前書、421ページ。
- (22) 同前書、421ページ。
- (23) 同前書、421ページ。
- (24) 同前書、422ページ。
- (25) 同前書、422～423ページ。
- (26) 同前書、423ページ。
- (27) 同前書、423ページ。
- (28) 松原泰道、法華経入門、平成6年、221～225ページ。
- (29) 同前書、221～225ページ。
- (30) 『アザリア』は、大正6年7月創刊され、大正7年6月発行の第6号で終刊となる。
- (31) 宮澤賢治書簡、校本、宮澤賢治全集第13巻所収昭和60年、89ページ。
- (32) 同前書、186ページ。
- (33) 同前書、193ページ。
- (34) 別冊国文学・NO.6 佐藤泰正・編・前掲書、58ページ。
- (35) 賢治が国柱会本部を訪問した時面会した、同会の理事。
- (36) 校本宮澤賢治全集第14巻所収、昭和60年、536ページ。
- (37) 同前書、536ページ。
- (38) 前掲全集第13巻所収、72ページ。
- (39) 前掲全集第14巻所収、541ページ。
- (40) 宮澤賢治どんぐりと山猫、校本宮澤賢治全集第11巻所収、昭和60年、9～16ページ。1921年9月18日の作とされる。
- (41) 宮澤賢治、注文の多い料理店、同前全集所収、28～37ページ、1921年11月10日の作とされる。
- (42) 宮澤賢治、狼森と策森、盗森、同前全集所収、19～27ページ、1921年11月の作とされる。
- (43) 大正13年12月、イーハトブ童話『注文の多い料理店』として刊行。
- (44) 宮澤賢治、冬のスケッチ、校本宮澤賢治全集第6巻所収、昭和60年、7～62ページ。
- (45) 佐藤成、証言宮澤賢治先生、農山漁村文化協会、1992年、140ページ。
- (46) 同前書、38ページ。
- (47) 同前書、45ページ。
- (48) 同前書、49ページ。
- (49) 同前書、49ページ。
- (50) 同前書、51ページ。

※引用文中の旧漢字は、すべて新漢字に改めたことを断わっておきたい。